

Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 フォンス サピエンティエ



Information
de la Bibliothèque
de l' Université SENDAI SHIRAYURI

No. 12
2012.4.1

大学図書館の未来像

仙台白百合女子大学 学長 石出 信正

「大学にとって図書館の果たす役割は？」などと、大上段に構えず、「私にとって本とは？」と考えてみます。一人暮らしの私の父の家では昨年の大震災で本箱が倒れ数千冊の本が床を打ち破り、寝るところがなくなり、とりあえず床を直したものの本がうず高く、がれきのように重なったままです。そのような家で育ったので、私も購読していた医学の洋雑誌は二十年以上きちんと製本して背表紙に金文字を打ち本箱に並べていました。ところがそれらの内容は現在ではデータベース化され瞬時に検索ができ卓上のPCで、あるいはパットPCで外出先でも読めるようになり、数年前に思い切って全ての雑誌を廃棄しました。本を積んだトラックが角を曲がって消えた時の脱力感は今でも覚えています。

新刊本はもとより古い本でもアマゾンの古書店で探すと、たいがい見つけられて数日で手に入れることが出来ます。以前のように図書館めぐり、古書店めぐりをすることもなくなりました。このような情報化の時代、流通革命の時代に、図書館はあるいは本は存在価値があるのでしょうか。私も医学の専門書、最近ではなんと文学の本（『小説の処方箋』鼎書房）の編著者に名を連ねるなど何冊かの本を出版してきました。一冊の本が出来上がるまでには多くの人々の手を経ます。専門家によって内容が批判され、プロの編集者によって校正され、発売された後も書評され、読者の評判が悪ければ返本されます。このようにして本は内容の質が保証されてゆきます。一方、インターネットの世界には情報が溢れていますが、質の担

保はまったくありません。

大学の図書館では先生方の推薦による本が蓄積されています。皆さんは大学の図書館である程度、選別された質の高い情報に接することが出来るのです。

もちろん、情報化の時代に対応した図書館のあり方を追求してゆく必要があります。従来の役割である出版物の蓄積に加えて、教育機関の施設として、①学生の情報検索能力を高める、いわゆる情報リテラシーを鍛えて「情報貧者」に陥らないような訓練の場となるべきでしょう。さらに、②情報をただ受け取り蓄積するだけではなく、大学の情報を出版物（充実した「紀要」が基本でしょう）として、あるいはネット上に発信する役割もあります。いわば情報センター、広報センターとしての役割を今後、積極的に果たすべきだと考えます。図書館の未来像は大いに広がりががあるのです。

本好きの私は読みかけた本を途中で止めると、食事が美味しく無くなるので、退屈な本でも最後まで読み通しますが、最近の学生さんで一冊の本を最初から最後まで通して読んだことがないという方もいて、驚かされます。読書はやはり「習慣」なのでしょう。何かのきっかけで読書に慣れれば、豊かな知識の森に入ってゆくことが出来ます。本学の図書館の現状は少し、静かすぎるように思います。もちろん図書館ですから物理的な「静寂」は絶対条件ですが、心が躍る、「心のにぎわい」とでも言ったような仕掛けをつくって、読書への敷居を低くし、皆さんに読書の習慣を身につけてもらいたいと思います。

◆ Contents

- 1 大学図書館の未来像
- 2 推薦図書
- 3 利用者の声
- 4 図書館からの情報
- 6 新着図書の紹介
- 7 図書館雑感⑪
- 8 図書館会議・研修会等の情報
- 8 図書館利用状況
- 8 編集後記



「長生き」が地球を滅ぼす ―現代人の時間とエネルギー― 著者：本川達雄 阪急コミュニケーションズ

健康栄養学科
小嶋 文博

この本で、著者は時計で計る物理的時間に対して、生物的時間という考え方を提唱している。内容盛り沢山なので、ここでは私が面白いと思った内容を紹介させていただく。

ネズミの寿命は2～3年、ゾウは70年。ゾウもネズミも生涯を生き切った感慨は同じ。ネズミとゾウでは、時間の速さが異なる。標準代謝率が大きい動物ほど時間は速く進む。ネズミは標準代謝率が大きく、ゾウは小さい。ネズミとゾウの細胞を比べると、ネズミは小企業で一人一人が頑張っているが、ゾウは大企業で、その社員はサボっているというのと同じといえる。

変温動物から恒温動物への進化では、体内の恒環境化のために30倍ものエネルギー消費量を増やした。日本人は体の外側の環境までも一定にし、より高速で安定した予測可能で正確な行動を実現するために、さらに40倍ものエネルギー消費量の増加をもたらした。ヒトの哺乳類としての生物学的寿命は26.3歳である。しかし、実際には80歳という長寿命。これは40倍というエネルギー投資による恒環境化等の恩恵である。生物

学的寿命を超えてまで長生きする高齢化社会の生き方を私たちに教えてくれるものは何もない。寿命を延ばす。それをどう使うかは人間の自由。核エネルギーを開発する。それをどう使うかは人間の自由。科学の理屈は同じである。

老人の時間は子供の時間の2.5倍ゆっくりである。子供はネズミの時間、老人はゾウの時間である。寿命が延びた分は「おまけの人生」。老人の時間は若者のものとは全く異なることを認識することが必要。「おまけの人生」とは2つの違った生を生きることである。

さて、結論部分は皆さんに読んでいただくことにして、「エネルギーを使う＝働く」ことによって時間は生まれるものであり、生の時間の長さによって価値が決まるものではないということをよく理解できる本であると私は思う。すなわち、頑張って仕事をして（エネルギー消費量を大きくして）命が縮んだ（生の時間が短くなった）からといって、丸損したと思う必要はないのである。さあ、皆さんもこの本を一読されて、人生と時間について再考してみてはいかがでしょう。

心を整える／著者：長谷部誠 幻冬舎

教務課長
佐藤 啓朗

私が今回紹介する本は、「心を整える」です。この本の著者である長谷部誠はサッカー選手で、Jリーグの浦和レッズで活躍し、その後ドイツに渡ってプレーをしており、現在の日本代表チームではキャプテンとしてチームをまとめています。そんな彼の本を手にしたのはある偶然からでした。震災後しばらくして立ち寄った書店で「印税は全額、東日本大震災支援に寄付します」と書かれた本の帯が目に入り、社会貢献の一環で著者も内容も確認せず購入したのがこの本でした。

著者がサッカー選手なので、内容は経歴や成績そして今後について書かれた自伝的なものだと思います、読み進めていきましたが、実際に読んでみると思っていた内容とはだいぶ違っていました。

この本は著者の経験や体験をもとに、「メンタル」すなわち「心」に関する事について多く書かれており、いわゆる自己啓発的な内容になっています。一般に市販

されている自己啓発本は内容が難しく理解しにくいものも多いですが、この本では具体的な話（サッカーに関する事が多い）をもとにサッカー選手としての観点から書かれてはいますが、一般の社会人や学生に置き換えても理解できる内容になっています。特に本のタイトルにもなっている、「心を整える」という部分では、疲れた心を整理整頓することで前向きに過ごすことができる。ということが書かれており、とても参考になると思います。

また、学生には今後の就職活動などで、日々の生活リズムや心が乱れた時に読むことで、心を鎮め、前向きになることができるので機会があればぜひ読んでいただきたいと思います。

最後にこの本は、サッカーが詳しくない人でも気軽に読めます。

池上彰の学べるニュース3(国際問題・外交編)／著者：池上彰 海竜社

人間発達学科 2年
小川 千絵

普段、国際問題・外交のニュースを観ていて疑問に思うことはないだろうか。例えば、どういう背景で中国が発展したのか。また、なぜ円高が進んでいるのかなどといった疑問をいただくことが頻繁にある。テレビではあるニュースについて短時間でしか解説してくれない。もっとくわしくあるニュースについて知ろうと新聞を読んだり、討論を観たりして理解するのは私にとって難しくなかなか興味を持ってない。そんな時、書店に行って目にとまったのがこの本だ。著者は池上彰さんだ。恐らく一度はこの人のことを耳にしたことはあるのではないか。彼はテレビや大学での講義をして身近な問題から幅広い問題を解説している人だ。また、彼はただニュースを解説するのではない。その問題が起きた背景から今後どうなっ

ていくのか細かく図を使って説明したり、疑問を投げかけて興味や関心をそそる。

池上さんは本の中で次のように言っている。これまで国際問題は難しいと考え敬遠する人が多いテーマだった。だが、基礎から順番に見ていけば、容易に理解できる。理解できないと興味を持ってないが、わかってくるとニュースが俄然面白くなってくる。興味を持ってニュースを観るようになると、世界の問題とともに情けない日本の政治の現状も見えてくる。ニュースがわかると、何が問題なのかもわかる。その次は私たちが解決策を考える番だ。

皆さんもこの本をきっかけにニュースに興味を持っていただけたらと思います、私はこの本を推薦したい。

美女と野獣を結ぶ図書館

国際教養学科 加藤 美紀

ディズニー・プリンセスの中で異色なのは、『美女と野獣』の主人公ベルであろう。彼女は本の虫という設定になっている。男性の言いなりになるかわいい女性が白馬の王子様と結ばれる…という、古典的ラブストーリーからの脱却を目指して、自分の意志をもつ強くて教養ある女性をディズニー・アニメで初めて登場させたのだという。そのシンボルが本であった。印象的なのは図書館のシーンである。この日、野獣はどうすればベルを喜ばせられるか悩んだ挙句、ポットおばさんやリュミエールたちの助言もあって、城の図書館をプレゼントする。訪れたことはないが、世界一美しい図書館と名高いウィーンのブ

リンクザール国立図書館に似ていると聞く。ともかく壮麗で芸術的な大図書館である。ベルは感激のあまり野獣に心を許し、二人は急接近する。ミュージカル版では原案に基づいて、二人が一冊の本を通して互いの心を通い合わせる場面へと続くらしい。ベルほど本好きとはいえない私でも、自分が好きな本のよさをわかってくれる人に会うと、瞬間的に近く感じられるから不思議である。本には著者の精神世界が広がっている。その世界を共有する人との間に結ばれる精神的絆は浅からぬ気がする。

私の図書館利用法

入試広報課 堀籠 未来

私の図書館の利用法とは自ら本を借りるためというより、入試広報課員として高校生の皆さんを図書館に案内し、本学をアピールするために利用する場所です。

高校生にはまず初めに入館方法を説明します。図書館スタッフからカードを借り、一人ひとりにカードを使って入館してもらい、同時にこのカードが学生証でもあり、本を借りるためのカードでもあることを告げます。次に図書館は3階建てで、階によって蔵書の種類が異なることや、学生が利用する階も所属学科で自ずと違って

くるようだという話をします。図書館は本を読んだり、レポートを書いたりする大切な場所であること。また、時には好きなDVDを見たり、ソファでくつろいだりリラックスできる場所でもあることをも知ってもらいたいと思っています。

また、夏期休暇期間中などは高校生の皆さんにも利用可能です。図書館のスタッフが本の探し方など親切に教えてくださいますので、是非体験していただきたいと思います。

図書館という場所

総合福祉学科4年 鈴木 美穂

私は図書館をよく利用する。具体的には、ゼミの報告のため文献を検索する、自主勉強のため、気分転換のために活用している。図書館はとても静かな環境である。そのため、考えたいときや上手いかないことがあり落ち込んでいる時など、気分転換のために利用するに最適な場であると感じている。図書館にいと、何故か気持ちと和らいでくるのである。

私は以前、本がとても嫌いだった。しかし、大学に入学し授業のために図書館を利用する回数が増えるに連

れ、本が好きになった。高校時代は図書館に入ることなど全く無く、本とは無縁な関係であったのだが、今では図書館という場が私にとって一つの大切な場となり、読みたいと思う本が沢山ある。この自分自身の変化には驚いている。

図書館を利用する上で、学生の利用数の少なさが気になっている。多くの学生が利用し、図書館の魅力を感じてもらいたい。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。2011年度の開館は366日中235日。震災の影響もあり、通常よりも20日ほど少ない開館でした。図書館は開館して学生のみなさんへサービスを提供し、関わってこそ意義があると言えます。興味を持って図書館に足を運んでいただけるよう、四季を通して図書館ではどんな一年が過ぎていくのか、ご紹介いたします。みなさんが意外と知らない一面もあるかもしれません。

<春>

「421教室ってどこですか?」「1号館に行きたいんですけど…」

4月、迷子の学生さんが図書館へ助けを求めにやってきます。教室として利用するのは1号館～5号館まで5つの建物。山の斜面に建っている棟もありますので、4号館の1階を出ても5号館の3階にたどり着くといった状況に新入生は頭が混乱してしまうようです。

図書館にはシラバスも置いてありますので、それを目当てに来館する学生さんもいて、4月にはシラバスとにらめっこする姿をよく目にします。

毎日、閉館5分前になると、図書館だけ音楽が流れます。閉館の音楽です。選曲は「You raise me up」と「Time to say goodbye」。これを聞くと学生さんたちは帰り仕度を始め、職員は今日も一日が無事すぎたことを実感します。

5月連休明けくらいになると、図書館にはエプロンをした学生さんが登場します。空き時間を利用して図書館のお手伝いをしていただく**ライブラリーサポーター**さんたちです。月曜日から土曜日まで11人の学生さんにお手伝いいただいております。4月末に募集を始め、抽選で決定します。興味のある方は図書館掲示板にご注目ください。図書館の裏方が知れる上に、空き時間でアルバイトできるとあって倍率が高くなっています。

この時期、図書館の北側の裏山からはうぐいすの鳴き声がきれいに響いてきます。図書館内に入ると分かりますが、自然に囲まれた静かな環境で勉強することができます。これは図書館を案内する場合に最も強調したい部分です。ウサギやきつね、たぬき、キジなど野生動物の目撃情報も絶えません。みなさんはどの動物と出会えるでしょうか。

5月末には年度初の**最多利用者**の発表があります。毎月ごとの最多貸出者と最多入館者をそれぞれ1名ずつ掲示します。図書館内のステンドグラスがデザインとなっている**オリジナルバック**を進呈しています。たくさん本を読んでいる方を知って、自分もがんばろうと触発される学生さんもいます。

<夏>

図書館は冷暖房完備。節電の影響による熱中症対策で、昨年より特定の容器入った飲み物の持ち込みを認めることになりました。夏休み前には前期の試験が始まります。図書館内には**222の閲覧席**が用意されていますが、試験中にはほとんど埋まってしまう。学生さんが広い机にたくさんの資料を広げて勉強している様子



春、図書館棟とさくら



図書館裏にいたキジ



図書館1Fステンドグラス

も、風物詩として定着した感じです。

同じ時期、夏休みの**特別貸出**が始まります。9月の後期授業再開の1週間後に返却期限を設けた長期の貸出となります。夏休み中は開館時間が短縮されることもあり、2ヶ月ごとの開閉館をお知らせした“しおり”を作っていますので、そちらもご活用ください。

<秋>

9月末、後期授業が始まります。夏休みでしんとしていた学校に賑わいが戻ります。読書の秋ということで、図書館を利用する学生さんが増えるのもこの時期です。図書館に置いて欲しい本の**リクエスト**も受け付けていますので、読みたい本が図書館にない場合は、申し込んでください。

古新聞を学生さんたちがもらいに来るのは大学祭準備日です。大学祭は10月末に行われています。古新聞をゼミでの発表に利用したり、屋台の掃除に利用したり使い方は様々ようです。大学祭での研究発表の準備に、図書館や食堂の広い机で頭をつき合せて使う学生さんも多数お見かけします。

<冬>

本学はカトリック大学ですので、11月末のアドヴェント（待降節）を皮切りに、図書館にもクリスマスリースなどのデコレーションが施され、クリスマスをお祝いする雰囲気が盛り上がり始めます。

卒業論文を選択している学生さんによる**文献複写**が増えてくるのはこの頃です。文献複写とは、雑誌などに掲載された論文や記事をコピーすることです。本学の図書館にない場合は他大学図書館へ依頼することになります。350タイトルほどの雑誌を所蔵しておりますが、希望の雑誌がない場合も多く、他大学へお願いすることとなります。遠くは沖縄、九州へ依頼することもあります。

卒業式を境目に図書館は新年度準備のためのお休みに入ります。1年間の汚れを落とし、新入生を気持ちよく迎えることができるよう、また、在校生も新たな気持ちで利用することができるよう準備をします。

<さいごに>

以上、図書館の四季をご紹介します。約10万冊の図書を所蔵しておりますが、ケイタイ小説や電子図書などが普及しつつある今日、本を手にした図書館を利用する機会は減っているのかもしれませんが。

食堂と同じくらい大学生活の中に図書館が普通に位置を占め、勉強に交流に場を提供できますように…。

また、みなさんの4年間に少しでも図書館や図書館の本たち、そして図書館スタッフが関わることができますように…。願ってやみません。



夏、図書館棟とさくらとモニュメント



12月、1号館横のクリスマスツリー



冬、図書館3階からの仙台市内の眺め



書館から“NEWS”を続々発信！

新着図書の紹介



「原発にしがみついた人びとの群れ：原発利益共同体の秘密に迫る」 小松公生 著 新日本出版社

なぜ、いま「原発の輸出」なのか？どうして、再稼働を急ぐのか？踏みこじられる「ノーモア・フクシマ」の願い。原発を推進する勢力のからくりとは…。(BOOKデータベースより)

「財界・政界・官僚・御用学者・巨大メディア」の五角形勢力。この勢力がどのように原発を推進してきたかを、豊富な資料を使ってその知られざる姿と全体像に迫る。(日版MARCより)

東日本大震災のあと、スポンサーである企業がのきなみ自社CMを「自粛」した中で、しきりにACジャパンのCMが流れていた。そのACジャパンと電力業界との知られざる関係に触れる第1章からはじまり、「原子力村のペンタゴン(五角形)」とも呼ばれる原発利益共同体がいかにして原子力発電を推進してきたのかを詳しく述べ、原発災害の除染と賠償は原発利益共同体の責任で行うべきと断言する。小冊子ながら必読の書といっていゝであらう。

その他、放射能の汚染状況を詳細に描いた「ホット・スポット」や、原発に対する小中学生たちの真摯な議論を扱った「僕のお父さんは東電の社員です」などの原発関係の本も入っているのて、こちらも是非読んでいただきたい。



「舟を編む」 三浦しをん 著 光文社

出版社で『大渡海』という国語辞典づくりに情熱を注ぐ人々の物語である。

辞書づくりひとすじ37年というベテランの編集者が、定年間際新規の辞書企画が立ち上がり囑託となって辞書づくりをつづける。彼が、主人公である後継者に辞書づくりの主役をゆだねるにあたって、監修の先生とともに決めた『大渡海』という名前を説明するくだりがある。「辞書は言葉の海を渡る舟だ」「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かび上がる小さな光を集める。もっともふさわしい言葉で、正確に、思いをだれかに届けるために。もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠とした大海原をまよえにたたずむほかないだろう」「海を渡るにふさわしい舟を編む」。本書の「舟を編む」という題名は、ここからきている。「いい舟を作ってくれ。多くのひとが、長く安心して乗れるような舟を。さびしさに打ちひしがれそうな旅の日々にも、心強い相棒になるような舟を」といった思いを託された後継者が受け継いで、紆余曲折の末完成するまで15年以上の歳月がかかった。

コツコツと辞書を作るという地味で膨大な手間がかかる作業がテーマとはなっているが、個性豊かな登場人物たちによるさまざまなエピソードがまた先へとページをめくらせる。彼らの辞書づくりにかける情熱が感動を呼ぶ物語である。



「蝸ノ記」 葉室麟 著 祥伝社

舞台は豊後羽根藩向山村。七年前、前藩主の側室と不義密通を犯した各で、家譜編纂と十年後の切腹を命じられ幽閉中の元郡奉行戸田秋谷。自らも刃傷沙汰に及びながらも切腹を免れた檀野庄三郎が、家譜編纂の補助と監視、そして七年前の事件の真相を究明するために秋谷の元へと連れられる。しかし、彼の清廉な人柄に触れ、無実を信じるようになった。いったい、七年前に何があったのか、何を思い、その日に向かって生きるのか…。命を区切られた男の気高く凄絶な覚悟を穏やかな山間の風景の中に謳い上げる、感涙の時代小説。

秋谷の凛とした清廉な生き方もさることながら、秋谷の息子都太郎の友達で、酔いどれの父親の代わりに家族を支えながら、明るさを失わない百姓の子源吉の生き様が心に沁みる。

帯にある“鳴く声は、いのちの燃える音に似て―”という言葉のごとく読後の余韻が残る、第146回直木賞受賞作。

また、その言動で話題となった田中慎弥の「共喰い」や、円城塔の「道化師の蝶」といった第146回の芥川賞受賞作も受入済となっている。



「くちびるに歌を」 中田永一 著 小学館

長崎の五島列島の中学校の合唱部の物語。美人の産休代理音楽講師につられて合唱部に入った男子生徒と、女子生徒の間に不穏な空気が流れるが、あるきっかけにより男子生徒もまじめに練習に取り組み、Nコンと呼ばれるNHK全国学校音楽コンクールを目指す。そのNコンの課題曲である『手紙～拝啓 十五の君へ～』にちなんで、十五年後の自分に向けて手紙を書くことになったのだが…。

中学生の感性、それぞれの抱えている事情が綴られる中に、時折挿入される十五年後の自分に向けた手紙が効果的に使われている。二人の語り手のうち、家族の事情もあり一人ぼっちで友達もいなかった男の子の手紙が、合唱コンクール本番のシーンとあいまって、爽やかな感動を呼ぶ。エピソードの、合唱を聞けなかった人たちのため数人で歌いはじめるシーンでおくるサプライズなども心温まる。非常に読後感の良い物語である。

作者の中田永一は、『GOTHリストカット事件』で第3回ミステリー大賞を受賞し、『きみにしか聞こえない』などの作品が映画化された人気作家“乙一”のもうひとつの筆名。



「自分の言葉で語る技術：グッとくる書き方と話し方58のコツ」 川上徹也 著 クロスメディア・パブリッシング

学校では“自分の言葉で語る技術”は教えてくれない。学生時代には「自分の言葉」や「自分の考え」などをもたない方が、波風を立てずにうまくやっていけることもあるが、社会人になるとそうはいかなくなる。就職活動でなかなか内定をもらえなかったり、会社に入ってから評価されなかったり、人生のすべての場面で損をする。借り物の言葉でしか語れないと、底の浅い人間だと思われてしまう。ネット時代になり、情報が簡単にコピー＆ペーストできるようになった今、ますます「自分の言葉で語る」ことが求められている。

自分の言葉で語れないと伝えたいことが伝わらない。多くの凡人は、揺るぎない確固たる「自分の考え」などもっていない。その時々で、まわりの言葉に大きく影響される。まったく何も考えていないワケではなく、いろいろと頭の中では考えているのだけれど、うまく整理ができない。また、自分の考えがはっきりあっても、適切な言葉で表現できないこともある。この本は、そんな人たちのために58の技術を提示している。(前書きより要約)



「世界ふれあい街あるき」DVD Box 1-8 西村雅彦 [ほか] 語り NHKエンタープライズ

“まるで自分で歩いているみたい。カメラがあなたの目になって、世界のさまざまな街を歩きます。美しい町並み、雑然とした路地、そこに暮らす人々とのふれあい。知らない街がきつとすきな街にかわります。”(キャッチコピーより)

自分の視点で世界の街をただただ歩きまわるとい、一見異質とも感じられる番組。各地の名所や観光スポットを訪ねたり、その土地の食物の紹介もショッピングもほとんどない。レポーターもいない。番組のスタッフによって選ばれた、著名人のナレーションが入るだけである。世界の路地をくまなく歩き、街の人々にやたら話しかける。そこにいる人々の日常のままの姿が映し出される。“ステディカム”という特殊なカメラを使い、坂道や階段でもなめらかな映像となっている。まさに、自分がその街に行ってその場所を歩いている感覚の疑似体験がテーマとなっている。いながらにして、自分が行きたいと思っている街をプラプラと歩く体験にひたってみるのも楽しいかも。

他に「永遠のチェルノブイリ」や、タバコの害や未成年の飲酒について、ひとつのテーマを10分間でコンパクトに解説する「Omin,ボックス 生活指導」なども新しく入ったので、ご視聴いただきたい。

3度目のフィリピン・ボランティア研修に行ってきた

総合福祉学科 半田 芳吉

3度目のフィリピン・ボランティア研修に行ってきた。この研修で初めての試みは、緑が丘にある白百合大学の学生と本学学生とのコラボレーションである。姉妹校でありながら、全く交流がなく、緑が丘の学生の属する学科と本学の学生の属する学科が異なるのでどうしたものかと憂慮していた。若い学生たちはその心配を払拭し、交流どころかあつという間に一体感という域に達していた。このプログラムのアクティビティに参加することにより彼女らの持つ力がエンパワーメントされて、身体と心も一体感が醸成されて本来持ち合わせていた情動(こころや魂)が揺さぶられていくのである。それらは次のアクションとなって創造されていくのであった。それは何なのか語ってみたい。

私たちの訪問したフィリピンの地域はSt.Paul University Manilaの学生の表現を借りると、なんであるな辺鄙なところに行ってボランティア活動なんて馬鹿みたい、誰も行かないよ、フィリピンだって素晴らしい見せたいところがあるわよ、という所である。ミセレオという村で、ピナツボ火山の爆発の被害にあった人びとにSr.たちが土地を買い、住宅を提供し、教育、医療の支援をしているところである。現在は村のコミュニティは住民による自治が始まり、Sr.たちは教育、住民たちの働く場である農場の運営をしている。また、マラニャオ県に住む山岳民族アエタ村である。いまだバナナの皮で葺かれた高床式の住居にすみ、子供らの大半が裸足で生活している。そこでSr. Evaは医療活動、栄養教育と教育等を支援している。この村、村はマニラから高速道を使っても片道4~5時間の距離の所にある。ミセレオには2泊3日、アエタには1泊2日のアクティビティである。

その村の子どもたちは、ボディランゲージならぬ身体で歓迎してくれるのである。小さい子は抱っこをせがみ、大きい子は手を引きあそびに誘うのである。おんぶして離れない子ども、鬼ごっこするもの、バレーボールに誘うものいろいろである。子どもらは、目は輝き、明るく屈託がないし、疑いもないのである。ミセレオのホームステイでホストマザーと一緒に食事を作り、みんなで食べたりもした。ホストマザーの親切な事、お互いに助け合う、そういう身についた物腰がひしひしと伝わってくるのである。お土産も用意して帰る時、

学生に持たせてくれた。ホストマザーと学生は抱き合い目がうるんでくるのはごく自然である。

子どもらは夕方、学生たちをバレーボールに誘った。バレーコートがあるわけではないし、ネットをかけるポールがあるわけでもない。ミセレオでは自動車の古タイヤを利用してホイールの上に棒を立てて、歪みがあるものの十分にバレーができる状態に張られていた。アエタではどうか。穴を掘って、杭のような木(棒にして)を立て石ころで固定しネットを張っていた。しかもミセレオの時よりもピンと張られていた。どちらもコートの枠など作らない。私の子ども時代に遊んだ三角ベースの草野球を思い出す。遊びというのはルールがなくても許されところがおもしろいのである。このような遊びの工夫と生活の知恵は私たちの忘れてしまったことである。それにしても見事である。子どもらと学生たちは夕暮れ時まで、全身全霊汗だくで無心に遊んでいる。

私の尊敬する梅原猛先生は「年々ふえる余暇の中で、人はレクリエーションを求める。スポーツ、セックス、カー、デモ、どんなにレクリエーションを求めても、それは、結局、単なるレクリエーション、気晴らしに過ぎないのである。真のよろこびは、やはり魂の喜びであることを今、日本人は漠然と感じ始めているのである。」と。村の子どもたちとの遊びは学生の本来持っていた心、魂がゆさぶられたのである。また、先生は「創造者に必要なものは、知識であるより、より以上に、無心であり、勇気であるように私には思われる」と言っている。先生のいう意図と異なるかもしれないが、エンパワーされて、アクションという創造力につながると前述したが、フィリピンという風土に身を投げ込み、無心に、そして勇気をもって同化する身体感覚がそこにはあったように思われた。学生たちの底知れないパワーがあることを、現地の子どもたちから教わった気がした。

この村には、まだ図書館というのは無いようである。子どもらは明るく健康に育ち、スカラシップで高校に、そして大学を卒業して現地の教職に就いているものも出てきた。自然は人を温かく育てていることを私たちはもう一度認識したい。

○2012年度図書館会議・研修会の情報(主なもの)

●2012年度日本カトリック大学連盟図書館協議会総会

期日:未定

場所:清泉女子大学

●2012年度東北地区大学図書館協議会総会

期日:9月予定

場所:東北大学

○図書館検索ツアーのお知らせ

図書館では申し込みがあれば、図書館使い方・検索の仕方・データベース等の紹介といった図書館検索ツアーを常時受け付けています。友達と2・3人のグループ単位でもかまいませんので、気軽にお申し込み下さい。

○データベース講習会報告

3月21日(水)10時～12時、情報システム管理室の協力を得て、コンピューター演習室Iにおいてデータベース講習会を開催しました。図書館で導入しているデータベースのうち、新聞系データベース・辞書系データベース、それぞれ各1時間ずつ、外部より講師を招いて講習を行いました。春休み中ということで学生さんの参加はありませんでしたが、今後は授業期間中の開催も考慮に入れ、続けていく予定です。

講習会は、時間があっという間に感じられるほど中味の濃い内容で、スタッフもいろいろと学生さんに役立つ情報を吸収することができました。オリエンテーションやツアーなどで、折に触れお伝えできればと考えております。

図書館利用状況

2011年10月1日～2012年2月29日

学科	人数	入館人数	学科・専攻 一人当(回)	貸出冊数(冊)	学科・専攻 一人当(回)	貸出冊数(冊)	学科・専攻 一人当(回)	AV閲覧回数(回)	学科・専攻 一人当(回)	AV閲覧人数(人)	学科・専攻 一人当(回)
人間発達学科	350	1,851	5.3	729	2.1	336	1.0	149	0.4	126	0.4
総合福祉学科	220	1,597	7.3	755	3.4	326	1.5	196	0.9	151	0.7
健康栄養学科	319	1,003	3.1	665	2.1	352	1.1	40	0.1	36	0.1
国際教養学科	251	951	3.8	252	1.0	129	0.5	69	0.3	64	0.3
科目等履修生	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
専任教職員	109	488	4.5	280	2.6	83	0.8	0	0.0	0	0.0
一般利用者(非常勤等含)	—	127	—	258	—	134	—	0	—	0	—
計	1,249	6,017	4.8	2,939	2.4	1,360	1.1	454	0.4	377	0.3

◆ 編集後記 ◆

大学院生の頃、レポートの資料として、図書館で、ある研究書を見つけました。その本は二十年以上前に図書館が購入したものでした。

司書の方が嬉しそうにその本を私に手渡したのを覚えています。長い年月、あなたに読まれるのを待っている本がある筈…そう、図書館はそんな「出会い」のスポットなのです。

(A.S)

今回の図書館からの情報では、今までの使い方・検索方法などといった情報とは違って、スタッフが図書館の一年を四季ごとに綴ったエッセイ的なものを掲載してみました。

また、図書館からのお知らせでは、数行ですが、図書館のデータベース講習会の報告を載せました。2012年度も講習会を行っていく予定です。図書館にどのような資料があるか、どのようなことが出来るのかを把握して、積極的に活用していただければ幸いです。

(生出)